

# ミュージアム 通信

## かつての信仰対象、その後 — 胞衣から考える 信仰の転位 —

[エデュケーション・レポート1]  
学ぶ・楽しむ  
～紅ミュージアムのいろいろ

[かわら版]  
期間限定ミニ展示のご案内

松亭金水識・歌川国直画・「丙午年出産の説」  
東京都江戸東京博物館所蔵

Image: 東京都歴史文化財団イメーリアーカイフ  
胞衣納めの様子(左下)。合せ口にし、縄で縛った土器皿を描く。



## かつての信仰対象、その後 — 胞衣から考える信仰の転位 —

### 信仰と埋納

有史以前より人類は信仰の現れとして対象物を意図的に地中に埋める行為(埋納)を行なっている。その中のひとつに胞衣埋納儀礼がある。

胞衣とは、胎児を包む羊膜や胎盤、臍帯などの総称である。胎児が産み出された後に排出されることから後産と呼ばれる。かつて胞衣は産まれた子供と同等とみなされており、また子供が成人するまで、子の分身として成長や運命に影響を及ぼすと信じられていたため、「胞衣納め」によって丁寧に葬られた。

胞衣納めの基本的な作法は、出産後に胞衣所と呼ばれる場所に数日間胞衣を置いた後、水(酒)で清めた後に布で巻き、胞衣壺または桶へ納めて埋葬する。埋葬する際、男児であれば筆、硯、硯などを一緒に入れ立身出世を願い、女児であれば針、糸、糸巻きなどを入れ

て針仕事の上達を願った。また銭が納められている場合は子供の健康を願い、神に奉納したものと考えられている。

## 庶民が胞衣を埋納する場合の最適な場所は？

江戸時代に、胞衣信仰は庶民にも広がる。胞衣は家の軒下、戸口、敷居の下など人がよく通る場所や踏まれる場所に埋める事例が多い。豊島区の巣鴨町遺跡―エクセルイン巣鴨地区―の発掘調査では、胞衣埋納遺構の大部分が中山道に面した表側(通り沿いの境界)で列をなして発見された。出土地点は建物の軒下にあたる。このように胞衣を人が多く踏むであろう場所に埋めるのは、胞衣を子供の分身と解釈し、たくさんの人に踏まれることによって子供が丈夫に育つというまじないの意味が込められている。

また、建物と裏口の間や隣接地との境など「境界」

とされる場所にも多く埋納されている。胞衣は、子供と共に母胎の中で育つた分身のような大切な存在とされながらも、得体の知れないものであり、「どっちつかずの存在」として「境界」に納めたと考えられている。

## 踏んでもらえばいいってものでもない

産まれた子供は、埋納した胞衣を最初に踏んだ者を恐れるといわれていた。例えば犬が最初に踏めば犬を、蛇が最初に踏めば蛇を恐れる子になるといふ具合である。そのため胞衣を埋めたら、子供の父親がその地を最初に踏み、親を畏れ

敬う子になるよう願をかけるといふ習俗があった。

江戸時代の川柳に「若殿のゑなは家老がわたりぞめ」という句がある。これは若殿が教育係である家老に畏敬の念を抱くよう家老が最初に踏む、という意

である。そのほか、「ゑなの上初(じよ)手金持がふんだろう」という句もある。これは自分が貧しいのは、胞衣を最初に踏んだのがきつと金持ちだったからお金を恐れるようになったってしまったのだと皮肉たつぷりに詠んだ句である。

## 胞衣のトリセツ

―その扱いはさまざまです―

縄文時代の住居内埋甕



巣鴨町遺跡―エクセルイン巣鴨地区―の胞衣皿出土状況(右上は合せ口の胞衣皿) 2007『巣鴨町を掘る―一眠りから覚めた江戸時代―』(NPO法人としま遺跡調査会)より転載

を、胞衣納めの容器とすることを議論があるが、その議論はひとまず置いておき、ここでは古代から近世までの胞衣納め容器とその取り扱い方の変遷をみていこう。

奈良時代の平城京跡からは和同開珎四枚、墨、筆先の失われた軸が入った須恵器の蓋付き壺が出土している。これは平安時代鎌倉時代の武家故実や公家の日記に記載されている胞衣壺の内容と同じであるので、平城京跡から出土した壺は胞衣壺とみて間違いない。九条道家の日記『玉蕊』の承元三年(一一〇九)五月二五日の記事にも「白瓷の瓶子(白磁の壺のことか)に銭五文を入れ、その上に胞衣を、胞衣の上に新しい筆を入れて蓋をする」とあり、平城京跡の胞衣壺と同じような納め方が書き留められている。このように、鎌倉時代までは須恵器や白磁の壺に胞衣を

納めていた。

室町時代になると、ここに「胞衣桶」という曲物容器が出現する。江戸時代前期くらいまで桶や曲物の容器が主流だったようである。木製の筒形容器の外側に胡粉を塗り、その上に雲母で鶴亀松竹などを描いている。

伊勢貞陸(一四六三―一五二一)が著した室町時代末期から戦国時代の武家故実『産所之記』には、伊勢流の出産儀礼が詳細に記され、胞衣の取り扱いについても記述がある。伊勢家は、室町幕府の政所執事の家柄として、近世には伊勢流と称し殿中の武家礼法などを伝える家として知られる。『産所之記』を以下に抜粋する。

一ゑなおけ。これも白きこ(粉)をぬり。其上に松竹壺をか(描)く也。ゑなおけのはこ。びやうぶばこのやうにさ、せ候。足を六ツ打申候。はこのながさたかさ。おけのかつこう(格好)によるべし。

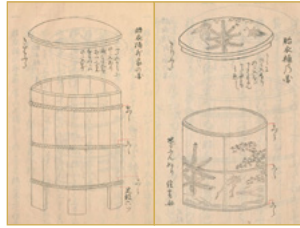
一、ゑなをよくあらひて。白  
ぎぬにつゝみて。ゑなおけ  
に入。あらふ時御見方の衆。  
口のみめ(達者)になきもの  
にあらはせらるゝ事なり。  
一、たい平の鳥目十三文(太  
平通宝)。ゑなにつゝみ。そ  
へおけへ入候也。

一、ゑなをおさむる時は。引  
目射たる人におんやうじ  
(陰陽師)のかみをそへ。二  
人つきて。よき方におさめ  
申候。帰りざまにどつとわ  
らひて帰る事也。

と、記されている。これに  
よると、「一」白い粉を塗  
り、その上に松竹亀を描い  
た胞衣桶を用意する。「二」  
足が六つの胞衣桶の箱を  
用意する。「三」胞衣は白絹  
に包み、胞衣桶に入れる。  
胞衣を洗う者は無口な者  
であること。「四」太平通宝  
の銭を胞衣桶へ入れる。  
「五」胞衣を納めるときは、  
陰陽師の選んだ吉方へ納  
め、帰りはどつと笑つて帰  
ること。というのが大まか  
なルールのようである。

『産所之記』には挿絵が  
ないので図示することが  
できないが、明和二年(一  
七六五)に伊勢貞丈が著  
した『産所法式』は図解つ  
きで記述しており、胞衣  
桶の様相を見て取るこ  
とができる。

『産所法式』を解説する  
と、「たらいのなかに胞衣  
を酒と水で洗い、白絹で包  
む。杉材の胞衣桶の底には  
白絹のかたびらを敷き、胞  
衣包みの上には、重しのた  
め太平通宝を紙でくるん  
で乗せる。胞衣包みと胞衣  
桶との間の隙間を綿で詰  
め、胞衣包みが動かないよ  
うにする。胞衣桶は蓋をさ  
ちんと釘で打ちつけ、さら  
に胞衣桶を胞衣桶外家と



胞衣桶外家 胞衣桶  
『産所法式』(『伊勢家礼式雑書17巻7』  
所収・国立国会図書館所蔵)

称する竹製の桶に納め、こ  
れにも蓋をする。胞衣桶外  
家を白・赤の絹で包み、壺  
に収容する。」とあるので、  
胞衣納めの儀礼は、江戸時  
代に入つてからも室町  
戦国時代とほとんど変化  
していない。ちなみに、こ  
れらの記述と類似した胞  
衣桶が港区瑞聖寺から出  
土している。

元禄五年(一六九二)初  
版の『女重宝記』の挿絵に  
は、武家屋敷と思われる場  
所で胞衣桶を埋めている  
様子<sup>ようす</sup>が描かれている。座敷  
の上に取り上げ婆と出産  
した母親があり、その前の  
土間で中間<sup>ちゆうかん</sup>がこれから胞  
衣を埋めようとしている  
ところである。

その後、江戸時代中ごろ  
には巢鴨町遺跡から出土  
しているようなカワラケ  
が多<sup>おほ</sup>用されるようになる。  
今日、胞衣容器として真つ  
先に思いつくのがカワラ  
ケである人も多いだろう  
が、こうして見ていくと木



座敷の上に胞衣桶が置  
かれている。  
『女重宝記』(当館所蔵)

製の胞衣桶を使用してい  
た時期も相当長い。有機物  
である木製品は、地中に埋  
めてしまうとなかなか残  
らないため、認識されづら  
いが、胞衣容器に木製の桶  
を使用することは決して  
珍しいことではなかつた  
はずである。

### 信仰対象でなくなつた胞衣

胞衣に対する信仰は、明  
治時代に入つても存続す  
る。(ちなみに、容器はカワ  
ラケ皿で、中央に「壽」の文  
字を刻印するものが出現  
する。)ところが、この風習  
を廃止せざるを得ない出  
来事が江戸時代末期に生  
じる。コレラの大流行であ  
る。江戸時代末期から明治  
時代にかけて伝染病が複  
数回流行している。コレラ  
に限らず、痘瘡、赤痢、ペス

トなど開国直後の時期に  
は多くの伝染病が蔓延し  
た。伝染病の拡大を防ぐた  
めには、衛生的な環境の維  
持が必要となる。明治二八  
年(一八九五)に法律によ  
つて規制され胞衣等を  
床下に埋めるなどの行為  
は禁止されることとなり、  
現在は専門業者によつて  
処理される対象となつて  
しまつた。

かつて信仰の対象とし  
て丁重に扱われていた胞  
衣が、現在は衛生的観念か  
ら処分される対象となつ  
た。もともと胞衣自体、建物  
と裏口の間や隣接地との  
境などに埋められている  
ことも多く、「生」と「死」の  
境の存在として、また子供  
の分身でありながら「どつ  
ちつかずの存在」として、い  
つも境界に立たされる立  
場<sup>たちばな</sup>でいた。現代も「神聖」と  
「汚物」の境界で人間の生命  
と向き合っている。

※ 逆に、恐れるものがないように人の  
踏まない場所に埋める習俗もある。

## 学ぶ楽しむ

## のいろいろ

伊勢半本店紅ミュージアムでは、教育普及事業の一環として、年間を通してさまざまな講座を開催しています。講座のテーマは、「紅」や「化粧」はもちろんのこと、それらの歴史文化の理解に繋がるよう、「江戸時代の暮らし」や「伝統工芸」「伝統技術」などもキーワードとしています。

定期的に開催している

「江戸の化粧再現講座」等に加え、平成二八年度から、化粧料以外の「紅」の用途にも焦点をあて、講座を開催しています。日本人の暮らしを多様なかたちで彩ってきた「紅」について、講座を通して迫ります。今回は平成二八〜二九年度に開催した講座をレポートします。

## ①染料〜紅染め体験

夏休み子ども自由研究

「赤色？黄色?? 紅染めにチャレンジ!」と題し、親子対象の紅染めワークショップを平成二九年度から開催しています。紅花の乱花(花びら)を使って、赤色素でハンカチを、黄色色素で和紙を染めました。現在、伊勢半本店では扱いのない「染料」としての紅に、講座を通してアプローチしています。



夏休み子ども自由研究「赤色?黄色?? 紅染めにチャレンジ!」実施風景

## ②食紅〜和菓子作り

和菓子職人を講師にお招きし、伊勢半本店が製造・販売している食紅「御料紅」



夏休み子ども自由研究「御料紅を使って和菓子を作ってみよう」実施風景

を使った和菓子作りの講座を開催しています。平成二八年度は親子対象の夏休み

企画二九年度は一般対象のバレンタイン企画として開催しました。和菓子職人の技術に触れながら、実際に季節の生菓子を作ること、時間とともに変化する紅のやわらかな発色を体感することができました。

## ③絵具〜浮世絵を知る・摺る

伊勢半本店では、一時、絵具としての紅の製造が途絶えていましたが、平成二七年度に復刻し、現在、「細工

紅<sup>べに</sup>として製造・販売しています。その細工紅を使った講座「浮世絵ワークショップ」〜摺り実演と細工紅を使った多色摺り体験〜を平成二八年度に開催しました。摺り職人の技を間近で見ただけでなく、細工紅を使った摺り体験もすることができました。

ことができました。

※1 今年度は8月3日(金)開催予定(7月10日申込み受付開始)  
 ※2 今年度は2月11日(月・祝)開催予定(12月11日申込み受付開始)  
 ※3 「紅ミュージアム通信」vol.9 参照



「浮世絵ワークショップ」〜摺り実演と細工紅を使った多色摺り体験〜実施風景

## Information

## かわら版

## 開催中! 期間限定ミニ展示「袋物コレクション」

2018年5月19日(土)〜6月24日(日)  
 袋物とは、紙入れや煙草入れ、鏡入れ、笥迫(はこせこ)などの総称です。江戸時代以降、用途や目的に応じて発達していった袋物は、当時の工芸技術の高さや趣向を語る貴重な資料です。今回は、館藏品より江戸時代後期〜明治時代の袋物(10点ほど)をご紹介します。



牡丹蝶文相良縫紙入れ  
 白羅紗地宝尽く丸文守巾着

Since 1825

## 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00〜18:00 ●休館日/毎週月曜日  
 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehantonten.co.jp>